「おさしづ」語句の探求（37）

「おさしづ」第４巻における個人の身上・事情と「道」

天理大学人間学部講師
おやさと研究所研究員
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

『おさしづ改修版』第４巻（明治29～32年）の年代は、日本全国に教会ができ、道は大きく広まっていったわけであるが、内務省訓令をはじめとする外部からの圧力に加えて、内部からの安堵事件、前橋事件という事情が起こってきた、いわば大ふしの年代である（『稿本中山眞之亮伝』第４章）。

第４巻には個人の身上・事情の「おさしづ」が368件ある。そのうち、「道」が用いられるのは223件、３回以上「道」が繰り返し用いられるのは115件である。用例数としては、第１巻から第３巻に比べて、第４巻では、個人の身上・事情の「おさしづ」のなかで「道」が用いられる割合が高いのが特徴である。それは、第４巻では「刻限」が少なく、「身上さしづにも刻限ちょい〳〵混ぜたる」（さ30・1・13　村田かじ身上願）と言われていることと関連していると思われる。

個人の身上・事情の「おさしづ」は、その脈絡はさまざまであるが、そこで説かれる「道」の論しは似た内容のものが多い。いくつかにまとめて整理する。

この道というは

第４巻における個人の身上・事情の「おさしづ」について、特に「道」に注目して通読して、最も印象に残るのは、この道というはどうであったか、どのように道が成り立ってきたか、という意味の論しが繰り返し説かれていることである。

「この道何処から付いた道か。よう聞き分け。聞き分けば明らか。」（さ30・3・31　清水与之助身上に付部内事情願）

「これまでどんな道も通り、どんな難も通り、山坂々々通り抜け、どうなろうという思案から一つ心、理が世界〳〵、これから何ぼうどれだけとも分からん。」（さ31・11・7　山田作治郎背中凝り詰めに付身上願）

「この道というは、今日や昨日や成りた道やない。皆心という、いつと無くして通りたこそ今日の日、めん〳〵もなあ、これまで心で思わいでも神が見通し、よく聞き分け。これまで通り難くい運び難くい道通りた理は、容易で通られたんやない。又それ〳〵聞き分けてやれ。この道何でも無く出けたんやない。」（さ32・8・11　増井りん五十七才身上願）

「道の中理の中一つ話聞き、それよりだん〳〵道、道というは、たゞ一時に成りた道やない。長らえての道。道というは、よう思やんしてくれ。」（さ32・10・27　松村さく身上の願）

挙げればきりがないが、こうした言葉が何度も出てくる。それぞれに身上や事情によって「おさしづ」を伺っているわけであるが、それに対して、多くの「おさしづ」では、この道というは容易に通られたわけではなく、難しいなかを長い年限掛けて通りぬけて、ようやく今があるということ、このところから思案をするようにと諭されている。

古い道失うてはならん

したがって、古い道失うてはならんと諭される。

「神の話や〳〵。存命中にも諭したる。なれど、年限経てば変わりて〳〵ならん。どうも存命中神の道教え、一つの理とは変わりてならん。何名何人よう聞き分け。この道という一つの心というて、世上へ諭する処、皆んなはどう思うても、俺はこうとしっかり神の道、理一つの心に寄せるよう。」（さ30・1・13村田かじ身上願）

「どれだけの者でもこれだけの者でも、この道始めた理聞き分け。道は一つ万事事情、一時世界に有る理か、無き理か。一つ理で、何処から何処まで、あら〳〵一つ来たる中に、なあ心得ん〳〵。これは心という道ありて、心というはどうもならん。神の道と人間心ところっと違う。」（さ31・3・23　山田作治郎身上の願）

「どうでもこうでも古い〳〵道失うてはならん。いつ〳〵さしづ及んである。何でも彼でも古い道失うてはならん。これ台である。」（さ32・5・8　山沢為造東分教会へ明日より出張の事願）

ここで強調されるのは、教祖が存命中に教えられた「神の道」である。段々と年限も経ち、時代状況も変わっていくなかにあっても、「皆んなはどう思うても、俺はこう」と教祖が教えられた道に、変わることなく心を寄せるように説かれている。それは「古い道」とも言いかえられ、それこそがこの道の台であると言われる。その道を通るには人間心はいらない。「神の道は人間心ところっと違う」と言われ、「この道始めた理」を聞き分けるように諭されている。

道は一つ

こうして「神の道」に心を寄せることによって、「道は一つ」であると説かれる。

「道というは、いつまで一つの道、何程尽したとて、外所（よそごと）事言うてはならん。誰はどうという事は、これは要らん。」（さ30・12・8　河原町部内水口支教会長藤橋光治良四十才身上願）

「この道という、道という道は外に一つとあらせん。将来と言えば末代の理を定め。何処からこう、彼処からこう。枝は要らん。道というは一条の道や。」（さ31・11・4　土佐卯之助身上願）

人間心を出せば、個人の数だけ考え方があり、それによって道は幾筋にも分かれることになる。しかし、常に神の道を心のめどにして、枝先のことや、ほかの物事にまどわされず、「道は一つ」であることを取り違えることのないようにと諭される。

道の理

その際、「道の理」が大事だと言われる。

「成程というは理なれど、道外（はず）して理があろまい〳〵。同じ理なら言うも言わんもあろまい。よう聞き分け。道という理ありて道、道の理が無うて道と言えようまい。」（さ32・12・27　桝井安松二十三才身上願／押して）

「道」という言葉で、この教祖の教えや歩みを表現するのが、自明のこととなってきているが、そこに「道という理」がなければ、「道」でないとされる。上記の「おさしづ」の言葉をみてくると、この「道という理」とは、これまでに教祖が始められ、容易でないなかを長い年限掛けて親神が連れて通ってきたという「この道」の根本を指しているように理解できる。

このように大ふしの年代、第４巻における個人の身上・事情の「おさしづ」では、「この道」のはじまりに立ち返って「道は一つ」であることが説かれ、その「道の理」に心を合せて歩みを進めるように諭されている。